

きもち浴

9月某日。私に第3子が誕生しました。待望の男の子でした。

私以上に、私の父(つまりおじいちゃん)が狂喜乱舞でした。そして、今度の出産は自宅出産だったのでその時のことを書きます。

なぜ、自宅出産にしたのかという理由から始めてみます。

私には、4歳と2歳の娘がおります。もし、今度の出産も今までと同じように病院による入院、出産だと、私が2人の娘のすべてをみななければいけなくなり、それはとても困難なことでした。たとえ、出産で横になっている時間が多くとも妻が家で見てくれる方が良いと考えました。

次に、経済的理由からも自宅出産を考えました。

病院出産の場合、出産し入院することで、お医者さん、看護婦さんが常に近くにいてくれるので、緊急な場合を考えるととても安心出来るという面がありますが、その分、支払う費用も高いという当然の結果があります。幸いにも、私の自宅から10分たらずのところに助産婦の先生がいらっしゃいました。費用の面でも私どもが納得ゆく(私どもにとって無理のない)金額なのでした。そして、“いざ!”という時、連絡をすれば、10分たらずで来て下さるなら大丈夫だと考えたのです。

しかし、自宅出産を決めた大きな理由は、妻の意思であったことは間違いありません。

上の子供2人は病院で産みました。その経験から、妻は、『どうも、みんなに産ませてもらったという、自分が他力本願で出産したんだと思う。だから3人目はもっと自分の力で、自分の家で出産したい。もっと、“あ>自分が産んだんだ”とおもえるような出産がしたい。』と、考えたのです。

私も妻の考えに同意しました。たしかに、上の子供の時、病院で安心して出産しましたが、すぐに、保育器、新生児室に入れられてしまい、抱くことすら許されず、顔を見ることですら時間制限、ガラス越しでした。そのことに対して、父親として多少不満があったことは事実です。“俺の子なんだから好きに抱かせろ!”と思ったことを今でも覚えています。

自宅出産をするということは、なんとなくですが、とっても大変なことなんだろうなあ、とは思っていました。でも、これらの理由から夫婦で挑戦することにしました。

さて、出産当日のこと。こんなとき男がいかになさけないかわかります。やみくもにタバコを吸ったり、やたらにノドがかわいたり、家の中をウロウロしたりともう落ちつきがありません。それでも陣痛がはじまり、妻の横で一緒に呼吸法をやって、とにかく妻を落ちつかせようと(実は、自分自身を落ちつかせる意味もあって)助産婦さんにおしえてもらった様に励まし、声をかけ続けました。「はい落ちついて、力を入れないで。赤ちゃんは、自分で生まれようとしているんだから、力を入れすぎないで。」と。声をかけるのが精一杯でした。

そして誕生した我が子。元気なうぶ声。はずかしながら涙が出ました。助産婦さんが子供の体をふいた後に「じゃあ、お父さんにヘソの緒を切ってもらいますね。」我が家にあったハサミを消毒液に漬けておき、そのハサミで、私が切ることに。

私は仕事柄、ハサミを使うのは、慣れてはいましたが、この時ばかりは、ハサミが震えているのが、自分でもわかりました。私が、このヘソの緒切ること、本当に母親と離れ、個の人間となる我が子。予想以上に固く、ゴムのような感触のヘソの緒を私は切りました。切り終えたばかりの子供を抱く喜び。子供は母なる妻の腕の中へ。初めて吸う母乳。目の前のすべての事は、ほんの瞬間的な出来事の連続なのにひとつひとつが一枚の写真の様に止まって見えて今でも忘れられないのです。

こうして、生まれた子供はいま元気に泣いて成長しています。

妻と考え、協力し、初めて挑戦した自宅出産は、どうにか成功しました。他力本願を嫌い、家族の力を最大限発揮して出産をした以上、これからも家族が共に大騒ぎしながらも楽しい生活が出来ればと考えています。

動物は、生まれたばかりの我が子をなめると言います。

人間も動物ですが、生まれたばかりの子をすぐに医療という科学の手にゆだねてしまい、抱くことすらままならないという現実があります。新生児、母体(母親)への衛生面等から必要な処置ではありますが、それに頼りすぎる事への不安を忘れてはいないでしょうか。新生児や母体への危険性を無視してまで、自宅出産を奨励するつもりはありません。一番に考えるべきことは、両者への安全性であることは間違いないのです。人間として、私はきっちりと生(誕生)をみつめてみたかったことや妻の意志、経済的理由、助産婦さんが近くにいらしたことなどの理由から、自宅出産に挑戦してみました。

私は、はっきり言いまして、それほど裕福ではありません。テレビに出演しているからと言って、すべてのタレントがお金持ちではないのです。そういう意味からいえば、3人目の子供をつくること自体がむずかしいことなのかもしれません。でも、私も妻も子供が好きで結婚する時から子供はたくさん欲しいと話していました。今の時代は、多くの子供を育てるのは、経済的に非常に難しいことだとわかっています。でも、それでも子供は欲しかった。貧乏でも子供は欲しかったのです。現在、日本の平均では、一家族に子供は、1.42人だそうです。これで、我が家は平均の2倍になりました。

久保田 雅人